

個人レポート

安部公房「赤い繭」——最終段落が表すもの——

寺 嶋 優 璃

一 はじめに

安部公房「赤い繭」は一九五〇年一二月発行の『人間』にて、「洪水」「魔法のチョーク」とともに、「三つの寓話」として発表された。夜に人は休まなければならず、休むには家が必要なことから、自分にも家があるはずだという持論のもと街中をさまようが、他者からことごとく否定され続けた〈おれ〉は、突如自分の身体が絹糸としてほぐれ、赤い繭になつてしまう。その赤い繭は、〈彼〉に拾われ、最後には〈彼の息子の玩具箱〉に移されるというあらすじだ。「三つの寓話」のひとつであることから、この「赤い繭」に寓話性があることは明らかだ。この作品の内容が何を表したものであるのかについて、執筆時の安部公房の状況や社会的背景を絡めて考察した研究は多く存在してきた。その多くは共通して最終段落に注目している。しかし、〈おれ〉が家を探している理由や、赤い繭を拾った〈彼〉が何者であるかなどの詳細がまったく描写されていないという内容の不鮮明さから、その解釈はさまざまである。

本稿は、先行研究を踏まえ、最終段落に注目し、〈おれ〉の状況や〈彼の正体などを考察した上で、この小説の寓話性を明らかにしたい。

二 最終段落について

最終段落は、以下のようになっている。

繭の中で時がとだえた。外は暗くなつたが、繭の中はいつまでも夕暮で、内側から照らす夕焼の色に赤く光っていた。この目立つ特徴が、彼の目にとまらぬはずがなかった。彼は繭になつたおれを、汽車の踏切とレールの間で見つけた。最初腹をたてたが、すぐに珍しい拾いものをしたと思ひなおして、ポケットに入れた。しばらくその中をごろごろした後で、彼の息子の玩具箱に移された。

先述した通り、この最終段落について、これまで多くの言及がなされてきた。

たとえば、森川達也氏は、

僕自身の印象を端的に言えば、この「落ち」は蛇足であり、作品全体のイメージを、かえって不鮮明にし、矮小化し、卑小化するものであると思う。(中略)そこに作者のねらう寓意性がこめられてい

ることは明らかだが、しかしその寓意はいかにも貧しくかつ常識的である。⁽¹⁾

としている。

また、田中裕之氏は、最終段落に先行する部分も含めて考察し、以下のように言及している。

《夕陽が赤々と繭を染めていた。》という一文に、最も明確に表れているように、作品の最終場面を含む、この引用以降における視点は、《おれ》のそれとは一致しない。これまで（中略）物語を映し出すカメラを想定すれば、カメラは常に《おれ》の眼に重ねられていたのである。ところが、この引用以降では、語り手は《おれ》のままであるにも拘らず、カメラは《おれ》の外部にあり、《おれ》の見ることの不可能な情景を映し出している。このカメラの位置に重なるのは、ほかならぬ作者の眼であろう。⁽²⁾

この田中氏の意見を踏まえると、最終段落に入ってから、〈おれ〉の視点は消えて、作品世界を俯瞰的に見ている別視点への切り換えが行われていると解釈できる。作中に突如俯瞰的な別視点からの語りを挿入するというこの手法は、草子地のようなものと考えられる。そのため、この最終段落は他箇所とはちがひ、「赤い繭」にこめられた寓話性が見出せる箇所であると言える。

では、この最終段落にこめられた寓意性とは何であろうか。安部公房は、

今日の問題として社会的関心こそ素材の中心たるべきであり、それは必然であるが、それが文学に於て捉えられる限りやはり固有な時間を持たねばならぬことを言いたいのである。⁽³⁾

とエッセイにて述べており、また同時期に発表された他のエッセイの内容も踏まえ、森村優太氏は、

これほどまで文学と「社会」について重要視しているのであるから、安部文学を考察する上で、「社会」は無視してはならないキーワードであると言える。⁽⁴⁾

と指摘している。そして、当時の社会背景について、高橋龍夫氏は次のように述べている。

おそらく、テキストの拡散的読みと安部自身の故郷喪失のモチーフの援用とのモザイク状況を解きほぐすには、やはり社会背景を視野に入れるべきだと思われる。安部がアヴァンギャルドの手法によって「赤い繭」を発表した時期がGHQ占領下の日本であったことは、実は「赤い繭」成立の決定的因子なのではないだろうか。（中略）翌一九五〇年には内紛を繰り返しながらも労働者と連帯した闘争を強めていく共産党や同党系の大衆運動に対して、GHQは朝鮮戦争の開始とともに国内の言論統制を強化し、七月から一二月にかけては大規模なレッド・パージを行った。⁽⁵⁾

安部公房がコミュニストであったことは知られている。そのことも踏

まえると、当時の安部に関りのあった社会背景がGHQによるレッド・パージであったというのは妥当だろう。加えてタイトルにも含まれる〈赤〉とは、レッド・パージの「レッド」からもわかるように、共産主義を想起させる色である。

では、「赤い繭」の最終段落を、レッド・パージおよび当時のコミュニケーションたちの状況を絡めて考察してみる。

三 主要人物について

まずは〈おれ〉について明らかにする。

〈おれ〉の正体とは何なのであろうか。当時の社会背景を踏まえるのであれば、真っ先に考えられるのは、「レッド・パージによって弾圧されたコミニスト」であろう。高橋氏は、そのことを「レッド・パージの受難者⁽⁶⁾」と表現している。また花田清輝氏による「家のないプロレタリアート⁽⁷⁾」という解釈の仕方や、中野和典氏による「家を求める姿勢の擬人化⁽⁸⁾」という捉え方も考えられる。ただし、それらの解釈を踏まえた上で〈おれ〉について考察した森川氏によると、〈おれ〉とは、「共産主義者のように見えつつ、作品世界のルールを無視する、どっちつかずの自由奔放な人間⁽⁹⁾」であるのだ。

これらの先行研究を踏まえて改めて確かめるべきは、〈おれ〉がコミニストであるか否かだろう。作品内の描写の中から、〈おれ〉がコミニストであると思わせるものを挙げてみる。

まずは、〈おれ〉と〈女〉の会話シーンだ。たまたま目に着いたという理由で〈女〉の家を訪ねた〈おれ〉は、〈女〉の家が自分の家ではないか、と問う。〈女〉に〈おれ〉が何者であるかを尋ねられ、そんなことは問題ではないことをうまく説明できず、やけ気味になった〈おれ〉

の主張が以下だ。

「ともかく、こちらが私の家でないとお考えなら、それを証明していただきたいのです。」

(中略)

「証拠がないなら、私の家だと考えてもいいわけですね。」

(女)「でも、ここは私の家ですわ。」

「それがなんだっていうんです？ あなたの家だからって、私の家ではないとは限らないでしょう。」

一見支離滅裂で自分勝手な主張だ。しかし、森村氏によると、これは、「共産主義に近い思想⁽¹⁰⁾」である。「共産主義の大きな意味での財産の共有(中略)」という風にも捉え⁽¹¹⁾られるのだ。また、はじめ〈女〉の笑顔を見たときの喜びを、〈希望の風が心臓の近くに吹き込み、それでおれの心臓は平たくなつてひろがり旗になつてひろがる。〉と表現している。これは、共産党の雑誌『赤旗』を想起させる。続く会話にて〈おれ〉が、コミニストとして主張することを暗示しているのだ。

ただし、森川氏は、〈おれ〉が公共のものである公園のベンチを自分の家としようとしていた描写については、共産主義とは一致しないとも述べている。故に、森川氏にとって〈おれ〉は、「共産主義者のように見えつつ、作品世界のルールを無視する、どっちつかずの自由奔放な人間⁽¹²⁾」なのだ。だがこれは、語られた順番的にも、もともと正しく共産主義の主張を掲げていた者の理論が破綻し始めている、とも読み解くことができるだろう。〈おれ〉はもともとコミニストとしての主張をしていたが、理論武装を繰り返すうちに、その主張は共産主義的理論から外

れたものになってしまった。理論武装を繰り返していたことと、レッド・パージは無関係ではあるまい。そうであれば、もともと〈おれ〉は、職に就いている、社会的立場のある人間だったはずだ。

それを踏まえると、〈おれ〉の家にない理由が呑み込みめないのも、首もつれない」というのも、〈おれ〉自身が、自分をこのような状況に追い込んだ社会などへ怒りや不満を感じていることの表現と読み解くことができる。

次に、〈彼〉について考察する。最終段落で唯一心情と行動とが描かれている人間だ。最終段落の描写を追いながら、〈彼〉の人物像を見ていく。

まず、〈彼〉が〈繭〉になったおれ〉を見つけたのは、〈汽車のレールと踏切の間〉という場所であり、また〈外は暗くなった〉とあることから、〈夕暮 時も過ぎて夜になりかけた、もしくは完全に夜になった時間帯である〉と分かる。この時間帯は、〈休まなければならない〉時間帯であり、〈ねぐらに急ぐとき〉はすでに過ぎていく。他の人と少しずれていることを示すような人物描写だ。しかし、〈彼〉には〈玩具〉で遊ぶ年齢の〈息子〉がいる。つまり家庭があり、家を持っているのだ。職に就いていることを明確に示す描写こそないが、〈息子〉がいることから、「父」という社会的立場・役割を持ち合わせている。

このような〈彼〉が〈繭〉になったおれ〉を見つけた理由は、〈繭〉が〈赤く光っていた〉からだ。この〈赤〉は〈夕焼〉の色があるが、先述した内容を踏まえると、共産主義の赤も同時に含まれていると言えよう。そしてこの赤い〈繭〉を見て、〈彼〉は、一度〈腹をたてた〉。わざわざ〈赤く光っている〉という〈繭〉の〈目立つ特徴〉によって〈彼〉に見つけ

られたと描写されていることから、〈腹を立てた〉のは、当時弾圧対象だった共産主義の象徴、もしくは〈おれ〉の変形した姿であることから、コミニストそのものを見つけたからではないかと考えられる。

しかし、〈すぐに珍しい拾いものをしたと思いたす〉。この心情の変化は、〈彼〉の共産主義への興味を表しているだろう。〈繭〉を〈ポケットに入れた〉ことから、〈繭〉を隠しているように読み取ることができる。当時の風潮から、〈目立つ特徴〉を持った弾圧対象を手にとって歩くことを避けたのではないかと考えられるのだ。

また、〈繭〉が〈彼〉のポケットから出され、〈玩具箱〉に入れられてしまったことについて、先行研究のいくつかでは、これからの日本を担っていく子どもの一人である〈息子〉の玩具箱であることから、このことを未来の共産党への「希望」の表れだと指摘している。〈息子〉が〈繭〉での遊びを通して共産主義を学んでいくということだ。しかし、〈息子〉が遊んでいる描写がないことから、〈彼〉が〈息子の玩具箱〉に隠したとも読み取れよう。仮に〈繭〉を〈息子〉の〈玩具〉としていたとしても、それもまたカモフラージュ的なものとも考えられるのだ。

そして、この最終段落には、森川氏が言うように、「落ち」としての役割が振り分けられているはずだ。そこで、次に「赤い繭」の結末について考察してみる。

そもそも、〈おれ〉が手に入れた〈誰にも妨げられないおれの家〉とは、本当に〈おれ〉が求めていた〈家〉なのであろうか。〈おれ〉にとつての〈家〉については、以下のようにある。

家……消えうせもせず、変形もせず、地面に立って動かない家々。

この〈おれ〉にとつての〈家〉の条件に〈おれ〉の手に入れた〈繭〉が当てはまるか考えてみる。まず、〈繭〉が〈消えうせ〉するような描写はなく、また、変形するようすもない。通常の繭であれば、いずれ中から虫が出てくるはずだが、〈おれの家〉となった〈繭〉は〈空っぽの繭〉である。そのため、今後中から何かが出てくることも、繭が破れて変形することもないのだ。もちろん、外部からの刺激などによる損傷や変形が起ころうとも考えられるが、作品内にはそのような描写は見られない。

しかし、〈地面に立つて動かない〉わけではない。先に述べた〈家〉の基準を参考にとすると、〈家〉とは完成した場所から動いてはならないものだ。〈おれ〉は〈繭〉になった時に〈家が出来〉たとしていることから、〈家〉つまりは〈繭〉の本来の定位置とは〈おれ〉が足をとめた場所、おそらく〈汽車の踏切とレールの間〉であると考えられる。しかし、〈彼〉によって〈繭〉は拾われ、持ち運ばれて、最後は玩具箱に〈移された〉。そのため、本来の定位置については言い難いだろう。つまり、〈おれ〉はずっと求めていた〈家〉を手に入れたわけではないのだ。

四 おわりに

以上のことを踏まえた上で読み取れる、「赤い繭」の寓話性とは何であろうか。まず、風刺的な面では、当時のGHQによるレッド・パージの風潮を指しているのだろう。では、教訓的面、つまりはこの話の主な語り手である〈おれ〉から学べることは、どのようなものであろうか。先述した通り、〈おれ〉の辿った末路というのは、本来求めていたもの（家）を手にすることができず、加えて〈家〉に変えるための身体を

失ってしまったというものだった。国家権力に所有される云々を置いておいたとしても、これは少なくともハッピーエンドとは考えられない。

そして、これまで注目してきた最終段落には、〈彼〉が登場する。最終段落こそ、この作品の寓意性を示している箇所であり、そこにわざわざ登場する〈彼〉は、おそらく〈おれ〉と対比されているのではないかと考えられる。

これまで考察したことをまとめると、〈おれ〉はもともと家があり、職についていた人間だったが、コミュニストであったためにレッド・パージによる弾圧を受け、そのすべてを失ってしまった。しかし、そのような社会の意見・風潮に反対するため、理論武装を繰り返していたところ、ついにはその持論も共産主義から外れたものとなっていき、求め続けていたものも手に入らなくなってしまった。対して、〈彼〉は家庭があり、家があり、そして社会的立場を持つ人間だ。しかし、〈繭〉を手にしたことで、共産主義の思想に触れ、おそらくその思想に対して興味を持つてしまった。ただ、最大の〈おれ〉との相違点は、それを隠していることだ。

つまり、当時の社会背景や〈おれ〉と〈彼〉の比較を踏まえた上で読み取れるこの小説の寓話性とは、自分がコミュニストであることを今は隠すべきだ、ということではないだろうか。「今は」としたのは、先行研究が言うように〈玩具箱〉が「未来への希望」を暗示しているものとしたからだ。レッド・パージによってコミュニストが積極的に弾圧されるような当時、自らコミュニストであることを主張して、共産主義の思想を振りまくのではなく、社会状況を冷静に判断し、自分の内にその思想を秘めて忍ぶ必要があったことが、この作品を通して読み解ける。

注

- (1) 森川達也「安部公房「赤い繭」」(『國文学 解釈と教材の研究』學燈社、一九六九・六)
- (2) 田中裕之「『赤い繭』論 その位置と意味」(『近代文学試論』二七卷、広島大学近代文学研究会、一九八九・一二)
- (3) 安部公房「文学と時間」(『近代文学』一九四九・一)
- (4) 森村優太「安部公房「赤い繭」論——「内容たる社会」とは何か」(『京都語文』二二卷、佛教大学国語国文学会、二〇一五・一一)
- (5) 高橋龍夫「安部公房「赤い繭」論 占領下における実存的方法」(『専修国文』七五、専修大学日本語日本文学会、二〇〇四・九)
- (6) (5) に同じ
- (7) 花田清輝『新鋭文学叢書2 安部公房』(筑摩書房、一九六〇・一二)
- (8) 中野和典「所有の始原——安部公房「赤い繭」論——」(『国語と教育』、二〇〇九・一二)
- (9) (4) に同じ
- (10) (4) に同じ
- (11) (4) に同じ
- (12) (4) に同じ

(付記) 本稿で引用した「赤い繭」の本文は、『安部公房全集2』(新潮社、一九九七・九)からのものである。